

# 同時代の美術見方

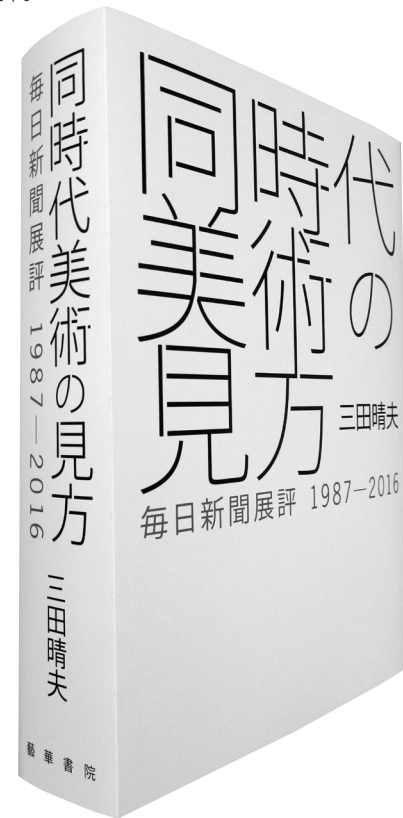
三田晴夫

毎日新聞展評 1987—2016

## 本書の特長

- 収録項目数1、450件。個展評・テーマ展評、来日作家へのインタビュー、追悼記事など現代美術の今日的流れを知る情報満載。
- インターナショナルに顕著な美術動向等はその発生から今日までの経緯を詳述。
- 「現代美術のWhy」「ホット・アート」「文化という劇場」など関連するコラム多数。
- すべての展覧会に作品写真図版を附し、作品の視覚的要点が一目瞭然。
- 収録作家名・展覧会開催画廊・美術館名・展覧会タイトルなどで辿れる索引群。

2022年  
11月刊行



2022年  
11月刊行

## 著者紹介

三田晴夫(さんだ・はるお)

- ・1948年、福岡県戸畑市(現・北九州市戸畑区)生まれ。早稲田大学政治経済学部卒。
- ・1974年毎日新聞社に入社。社会部記者を経て、毎日新聞学芸部美術担当記者として勤務。2008年退職。
- ・毎日新聞社退職後、美術ジャーナリストとして活動のかたわら、女子美術大学大学院、多摩美術大学、早稲田大学で現代美術の非常勤講師を勤めた。美術評論家連盟会員。
- ・著書に、『教養としての近現代美術史』(2019年、自由国民社)。画集内評論に、『中村宏画集 1953-1994 タブロー機械』(1995年、美術出版社)等。展覧会図録評論に、『イヴ・ダナ彫刻作品展』(1991年、国際教育学院文化事業部)、『菊畑茂久馬一天へ、海へ』(1988年、徳島県立近代美術館)、『彫刻林間学校展』(2017年、東京芸大美術館/軽井沢メルシャン美術館)等。「美術手帖」「月刊 ギャラリー」等に展覧会月評を執筆。

## 「本書より」ノートから：なぜ現代美術なのかと自問して(三田晴夫)

「実物には少しも心を動かされないのに、人はそれがそっくりに描かれているだけで感嘆する。そのように皮肉ったのはパスカルだという自分の走り書きを、ばらばらとめくっていた古い取材ノートの中で見つけた。今月末で美術担当記者としての現役を退くため、職場の机まわりを片づけていた時のことである。

彼の著作なぞ読んだためしはないので、たぶん美術評論書を介して、それがパスカルの言葉であるを知ったのに相違ない。絵画や彫刻における人物像の変遷について、文章にする必要に迫られていたらしく、その走り書きの周辺にそれらしい種々のメモも書き記されていた。

パスカルが冒頭の皮肉を呈したのは、絵画は対象の情報をたっぷりと盛り込んで描かれるのが当然とされた時代であった。しかし、偉大な頭脳の放つ風刺は、時代を経ても古びないのはさすがである。表現を少しいじるだけで、それは現代の状況に対しても見事な警句となり得るからだ。

実物には少しも心を動かされないのに、人はそれがそっくりに描かれていないだけで憤慨する、というように。そう、20世紀以来、絵画も彫刻も対象描写から一気に遠ざかった。従来の美術愛好者には、それは度しがたい変化だったろう。「現代美術はわかりにくい」という執拗な批判も、このあたりに起因している。美術を受け持った28年間、そんな「わかりにくい」現代美術のウォッチングを続けてきたのはなぜか。パスカルの言葉は、改めてそのような自問を促したのである。自分は決して、時代の最先端に立つ新しさを信奉してやまない進歩主義者ではなかった。はたまた現代美術への偏見や誤解をいさめようとする、啓蒙的伝道者を志したわけでもなかった。

ただ、美術を価値づけるのに、「わかりやすさ/わかりにくさ」が基準となっていることが、とても奇異に思えただけなのだ。その基準が結果的に、常識や通念の殻を破ってはばたこうとする、しなやかな精神や想像力の芽をつみ取ってしまいかねないことが。退役してからも、この違和感だけは手放さずいたいと思う。」

## 同時代美術の見方

毎日新聞展評 1987—2016 三田晴夫著

B5判(257×182mm)、並製(小口折) 総888頁

挿図多数、人名索引、展覧会索引等

定価＝8,000円＋税

ISBN 978-4-904706-20-6 C3070

●**お客様各位** 弊社は直販のみの販売システムです。ホームページ・メール・ファックス・電話・はがき等で直接ご注文下さい。振込用紙同封の上、商品をお送りします。また書店にご注文される場合、書店様から弊社へ連絡いただけますようお願いいたします。

●**書店様各位** 弊社は直販のみの販売システムです。ご注文の場合、ホームページ・メール・ファックス・電話にてお問合せ下さい。条件等ご連絡の上、納品させていただきます。

お取扱書店

注文書

株式会社 藝華書院

〒731-0231

広島市安佐北区亀山7丁目7番32号

TEL：082-812-2686

FAX：082-847-2644

メール：info@geika.co.jp

URL：www.geika.co.jp

同時代美術の見方 毎日新聞展評 1987—2016

同時代の美術を見続けて30年、本書は世紀末から新世紀はじめまで、毎日新聞の三田晴夫記者による展覧会評(展評)を時系列に集大成したものである。過去を扱う歴史的な展覧会ではなく、ただいま現在われわれの目前に生起する美術、まさに同時代の美術を対象とした記録集であり、美術の「いま」という歴史の記録集ともなっている。

個展からテーマ展、美術館から画廊街、ときに海外のビエンナーレなど、内外の美術状況をつぶさに目撃してきた記者の眼は展覧会の作品に何をみてどう論じてきたのか。その記述は、作品にこめられた作者の意図を解きほぐす過程で読者に考える契機を投げかけると言う姿勢で一貫しているだろう。一般社会面での美術報道といえば、技術を誇る流行の超絶技巧、あるいはオークションの高額落札値など、ポピュリズムに傾くものなどの多いのがこの国の実情だ。概ね一時の興奮で終わるそうした報道の裏面に着実に根を下ろし活発な展開を繰り返しているのが今や世界水準と言われるわが国の現代美術である。

ここに収録された1000件余の個展評は、自己表現を超えた真の芸術表現とは何かを問うことで貫かれているが、そうした中で繰り返し問われ続ける問題もまたある。「ガラクタの反芸術」に象徴される60年代、現代美術の前衛たちが一旦は追いやった絵画は何ゆえにその彼らによって復権を果たしたのか。あるいはまた、返還後半世紀を経てなお一括公開されない戦争画とは何かなど、観念主義とミニマルアートという表現の極限を迎えた70年代を経て80年代から90年代にかけて、反西欧主義と異文化への眼差しを含む多元主義の時代へと激変する現代美術史を一記者の眼から、いわば定点観測だから見えてくる芸術表現の展開の軌跡が本書である。芸術作品の機微に触れるとは作者と作品を通じて考える時間を共有することでもあるだろう。美術の「いま」を問うことは未来の価値を生み出すことにつながるの確信の下に。